

1962年の三宅島の噴火(I)*

(噴火活動状況)

気象庁地震課
東京管区气象台調査課
三宅島測候所

551. 21

The Eruption of Miyakejima in 1962 (I)

(Surface Volcanic Activity)

Seismological Section, J. M. A.

Investigation Section, Tokyo D. M. O.

and

Miyakejima Weather Station

Abstract

At 22^h 20^m on August 24, 1962, a great eruption in a radial fissure occurred on the NE flank of the central cone "Oyama" of Miyakejima, a volcanic island about 170 km south of Tokyo, after a dormant period lasting 22 years.

At the first stage of the eruption, it occurred on the middle flank of the somma (400~200 m above sea level), but soon after, points of eruption moved to the upper flank and to the foot the volcano. The eruption continued till the dawn of August 26.

Owing to the eruption, a chain of new crater-lets were formed in the rift zone, an enormous quantity of lava welled out from the crater-lets, and lava fragments were thrown out as high as 200 m. The new lava flowed down into three zones. Several new cinder cones were born on the flank. Volcanic smoke rose more than 5000m in height, and ashes or sands fell down at the N part of Miyakejima and Nijima (45 km NW of Miyakejima).

The area covered with the new lava flows is estimated as about $1 \times 10^6 \text{m}^2$ and the total volume of the new lava flows and volcanic ejecta is estimated as about $0.9 \times 10^7 \text{m}^3$.

Owing to the eruption, 4 houses were burnt down.

About 2 hours before the outbreak of the eruption, many tremors began to be recorded by a seismograph at the Miyakejima Weather Station. During and after the eruption, many volcanic earthquakes swarmed in and near the volcano. Especially, seismic activity increased in violence after the eruption, and continued for many months. The largest one in this swarm of earthquakes took place at 15^h 48^m on August 26, causing slight damages on Miyakejima island.

Fuming activity of the new lava flows or new crater-lets declined gradually after the eruption, but in April and September of 1963, new weak fumarolic areas were born along the zone of the old crater-wall at the summit of the central cone, "Oyama".

* Received Sept. 10, 1963

気象庁地震課 田中康裕編集

§ 1. ま え が き

昭和37年(1962年)8月24日夜、三宅島が22年ぶりの大噴火をした。この噴火に関して、気象官署からは、すでに第1表の報告物が発行されている。しかし、いずれも速報的なもので、その内容の修正および追加を必要とするので、ここに昭和37~38年(1962~63年)における三宅島の火山活動をとりまとめた。

第 1 表

気象庁：昭和37年8月24日三宅島の噴火、(昭和37年8月27日)
気象庁：昭和37年8月24日三宅島噴火概報、(昭和37年8月27日)
三宅島測候所：昭和37年8月24日三宅島噴火概報、第1報、(昭和37年9月17日)
東京管区気象台：昭和37年8月24日~26日の三宅島火山噴火概報、(1962年11月)
三宅島測候所：昭和37年8月24日三宅島噴火概報、第2報、(昭和38年2月1日)
三宅島測候所：昭和37年8月24日三宅島噴火の日記、(昭和32年2月20日)
東京管区気象台：三宅島火山噴火後の状況、(1962年10月~1963年3月)、(1963年5月)

§ 2. 噴 火 の 概 況

8月24日22時20分、三宅島の中央火口丘雄山山頂と赤場峠を結ぶ山腹で噴火が起こり、割れ目状にできた多数の火口から溶岩を流出した。また、この噴火のために、いくつかの噴石丘が新しくできた。噴火地帯は昭和15年(1940年)7~8月の噴火場所の近くである。

噴火は最初中腹(海拔約400~200m)で起こったが、のち、山頂寄りと山ろく寄りに活動地域を拡げた。噴火活動は、地震・鳴動・爆発を伴って、25日4時ころまで連続的に起こり、次いで次第に断続的になつて弱まり、26日5時ころからは地表面での噴火活動は認められなくなつた。しかし、地震活動は非常に活発で、噴火中はもとより、噴火後も約半年間にわたって群発した。

噴火活動の最盛期には、赤熱溶岩を火口から約200mの高さに噴きあげ、3つの大きな溶岩流となつて山腹を下り、そのうちの2つは海岸線を越えて沖合にまで押し出した。また、新噴石丘の中には、元の地表面から数十mの高さにまで成長したものもあつた。

噴煙は5000m以上の高さに達し、南東の風に流されて、島の北部一帯と新島(三宅島の45km北西)に火山

砂または火山灰を降らせた。

§ 3. 噴火の前兆現象

有史時代の三宅島の諸噴火では、噴火の前兆現象として地震・鳴動の群発、地温・噴気・湧水などの異常変化、地温上昇に伴う草木の枯死、地割れなど、比較的顕著な異常現象があつたことが伝えられている。しかし、従来の三宅島々内には地震観測点がなかつたので、前兆地震も体感によつて観測する以外に方法がなかつた。たまたま、昭和15年(1940年)の噴火を契機として三宅島に測候所が新設され、さらに、昭和32年(1957年)からは地震計も設置されていたので、今回の噴火および地震活動は器械によつて詳細に観測することができた。これは三宅島の噴火にとつて初めてのことであり、貴重な資料を残した。

i) 地震計に現われた前兆

三宅島測候所の地震計によると、噴火の始まる約2時間前の20時29分、1 μ 程度の孤立した微動が現われ、以後、微動は次第に振幅および数を増して行つた。21時25分以降、微動は連続的となり、22時20分には数十 μ の振幅に発達して噴火が起こつた。

なお、この微動が始まる前には、7月23日に火山性地震があつただけで、以後の1か月間は全く静穏な時期であつた。

ii) 体感による前兆現象

三宅島測候所では、8月11日に雄山の現地調査を行なつたが何ら異常は認められなかつた。また、噴火の始まる1時間余り前までは、体感による前兆現象らしいものは何一つ発見できなかつた。

8月24日20時57分、測候所で震度Iの地震を感じた。この地震は火山性微動の一つであり、場所によつては強く感じたらしく、神着部落の一部では戸外に飛び出した人もあつた。しかし、地震としては小さなもので、三宅島測候所を除く他の気象官署の地震計には何ら記録されていない。この地震以後、島内各地で地震や鳴動を

第 2 表

時 刻	場 所	電 話 の 内 容
22時少し前	大久保	西の方で山鳴りがしている
同 上	三池地区	下の方で地鳴りがしている
22時ごろ	神着 (村役場出 張所付近)	昭和15年の噴火の時にあつたと同じような地震が今起きている
噴火の数分 ~10分前	神着 (三宅島 郵便局隣)	山の方で地鳴りがする

感じた人があり、21時50分ころから噴火が始まるまでの間に測候所に第2表の電話連絡があつた。

なお、三宅島では電話局が神着・阿古・坪田の3区に分かれており、各々が市外通話になっている関係もあつて、島の南部からの電話連絡はなかつたが、後日、この方面の人達の話の聞くと、やはり地震や鳴動を感じた人があつたようである。

§ 4. 噴火の観測

上記のような前兆現象や電話があつたので、山の状態を確かめるため、22時10分、三宅島測候所の中村・谷出両技官は測候所の測風塔に登つた。塔の上から監視を続けているうちに、両技官は噴火の始まりを雄山の稜線越しに目撃した。この時の模様を中村技官は次のように語っている。

「山鳴りを確かめようと塔の上で山の様子を見ていた。この間約10分間、真黒な夜空が一瞬「ポツ」と明るくなり、丁度山の向う側で山火事が起きたように見えた。月の出を思わせるように、まわりが赤く反射したので、「ホヤ」と思う間に(1~2秒)、数条の黄色がかつた真紅な火の玉が線を引いて飛んだ。火花の数はずかだつたが、垂直に飛んだものはほとんどなく、大部分が水平に飛んだ。爆発音は聞えなかつた。次の瞬間、噴火を知らせるために塔をかけ下りた。」
以後、測候所では噴火の観測を始めた、噴火の初発から終息までのあらまはしは次のとおりである。また、第2~15図は測候所から遠望した噴火の模様である。

i) 噴火の初期 (24日22時20分~23時)

24日22時20分：雄山の山腹(稜線上で海拔約300~200m付近にあたる所)で噴火発生。

ii) 噴火の最盛期 (24日23時~25日04時) 連続的爆発。

24日22時45分：噴火地帯拡大。最初の噴火地点よりやや山頂寄りの所からも噴火、3か所から黒煙噴出。上部の噴火地点からは約200mの高さに溶岩を噴出。

22時56分：大爆発。

22時00分：5~10秒ごとに爆発。活動の中心域が次第に海岸寄りに移動。黒煙噴出。最初の噴火点付近からは赤熱溶岩を噴出。

23時01分、23時01分30秒、23時02分、23時02分10秒：大爆発。電光。

23時04分：5~10秒ごとに爆発。中央部の黒煙噴出域拡大。活動地帯がさらに海岸寄りに拡大。噴煙は北西に流れ、天頂数か所で電光。

23時10分：山頂寄りの噴火盛ん。

23時15分：大爆発。

23時16分：黒い泥を含んだ雨降り始める(降灰)。

23時18分：大爆発。

23時30分：地震・鳴動盛ん。

23時39分：山頂寄りの噴火地点はさらに100~300m上へ移動。

23時45分：泥雨止む。

23時52分：7合目付近で独立して噴火。

25日00時08分：停電(赤場暁付近で溶岩のため電柱が焼けたので)。7合目付近の噴火続く。約2分ごとに爆発。

01時00分：噴煙臭を感じず。

01時09分：再び降灰砂始まる。

01時30分：地震(震度Ⅲ~Ⅴ)ひんぱんに起こる。爆発音は小さくなる。

02時00分：強い地震と共に再び爆発音が多くなる(約1分ごと)。

03時00分：状況はほとんど変りなく、2~5分ごとに大きな爆発音を聞く。

iii) 噴火の末期 (25日04時~26日05時頃) 断続的爆発。(A~D点は第1~15図参照)

04時50分：黒煙を3か所から噴出、D点付近からの黒煙多量、B点付近の噴煙は低く弱まる。海岸寄りの噴煙は北に流れる。

08時10分：B点の噴煙は弱まり、D点の噴煙は黒褐色で5000m以上の高さに達し北~北西に流れる。E点の噴煙は白色で一部黒色、北に流れる。

13時10分：降灰止む。

15時00分：B点の噴煙消失。E点の噴煙は白色で200mの高さにのぼり、北に流れる。D点の噴煙は高さ5000m以上。

21時00分：D点の噴煙は高さ1500~2000m。

26日00時00分：D点わずかに赤く見える。噴煙の高さは暗夜のため不明。

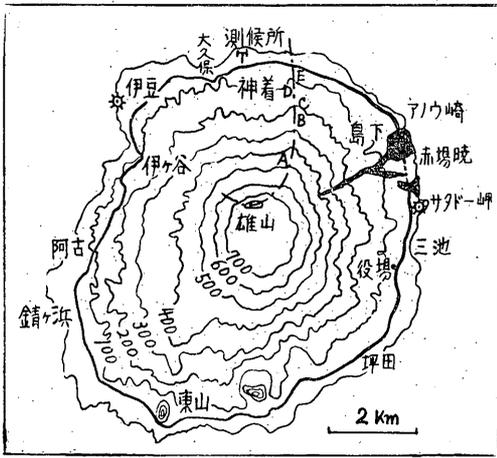
01時48分：爆発音1回、以後爆発音は聞えなくなる。

03時00分：D点だけ明るく見える。

05時ころ：噴火終息と推定される。地震活動はさらに続く。

以上は雄山の稜線越しの観測で、噴火地点を直接観測したものではない。そこで、この資料と第1図に示した雄山稜線および第2~16図を見くらべながら、噴火地点と噴火の順序を推定してみた。

噴火は24日22時20分に先ず中腹で起こり、24日23時52



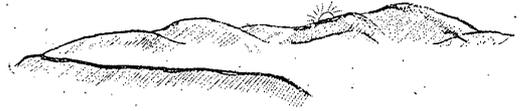
— · — · — 測候所から見た雄山稜線

第1図 三宅島要図

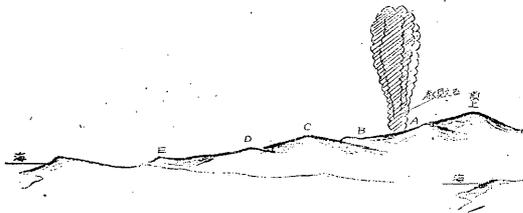
第2～15図 三宅島測候所からみた噴火状況の見取図
(昭和37年8月24～26日)



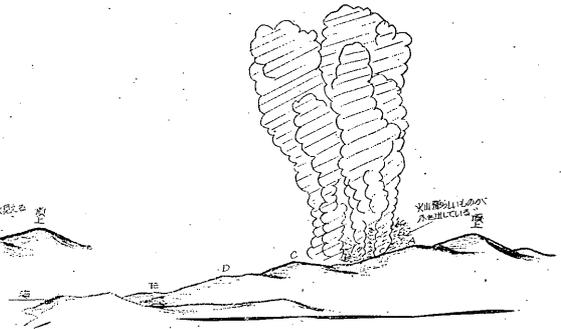
第2図 8月24日22時20分



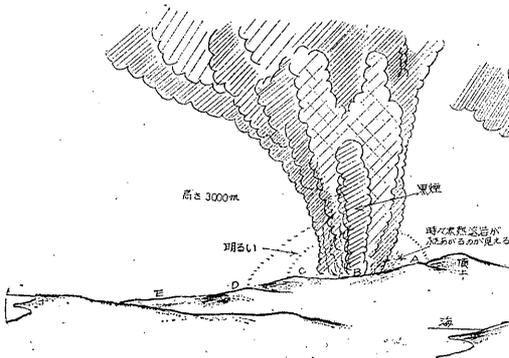
第3図 8月24日22時20分



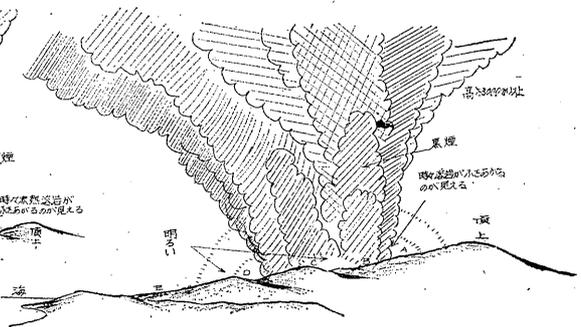
第4図 8月24日22時25分



第5図 8月24日22時45分

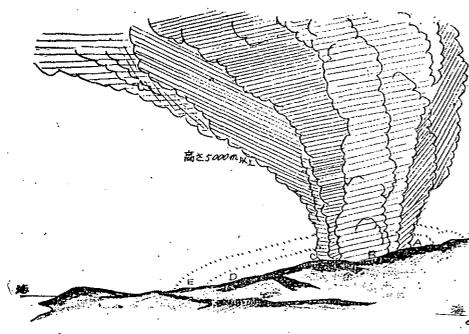


第6図 8月24日23時00分

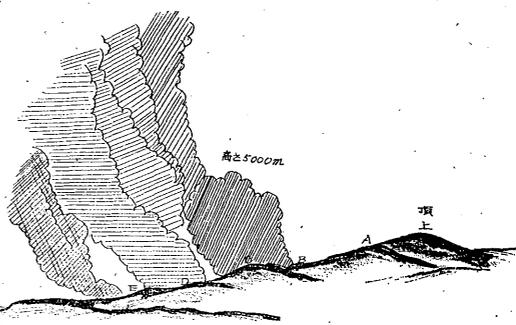


第7図 8月25日00時00分

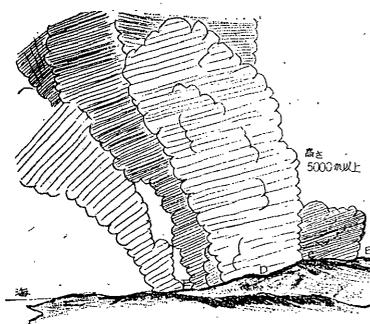
1962年の三宅島の噴火(I)



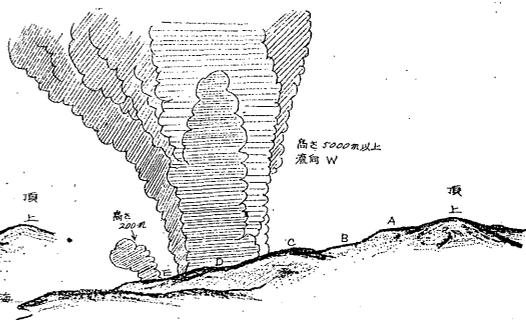
第8図 8月25日02時30分



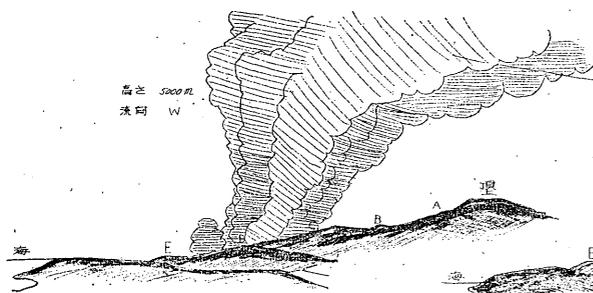
第9図 8月25日05時00分



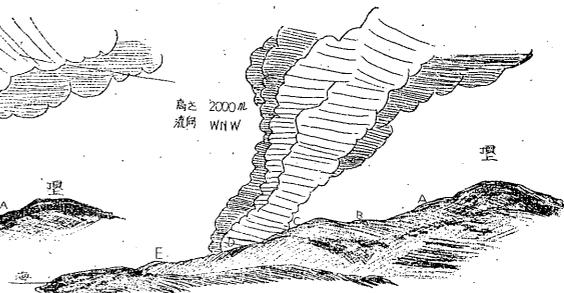
第10図 8月25日08時00分



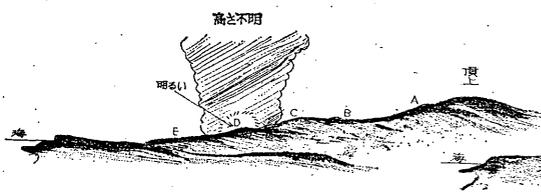
第11図 8月25日13時00分



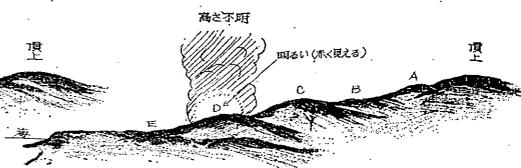
第12図 8月25日15時00分



第13図 8月25日21時00分



第14図 8月26日00時00分



第15図 8月26日03時00分

分から25日00時10分ころにかけて山頂寄りでも噴火したと思われる。これとほとんど同じところから、山ろく寄りにも噴火地域を拡げ、活動の中心域は次第に山ろくに移った。また、稜線の最下部E点に見えた白色（一部黒色）の噴煙は、溶岩が海に流れ込んだためにあがった水蒸気だと思われる。

§ 5. 新火口と火山碎屑物

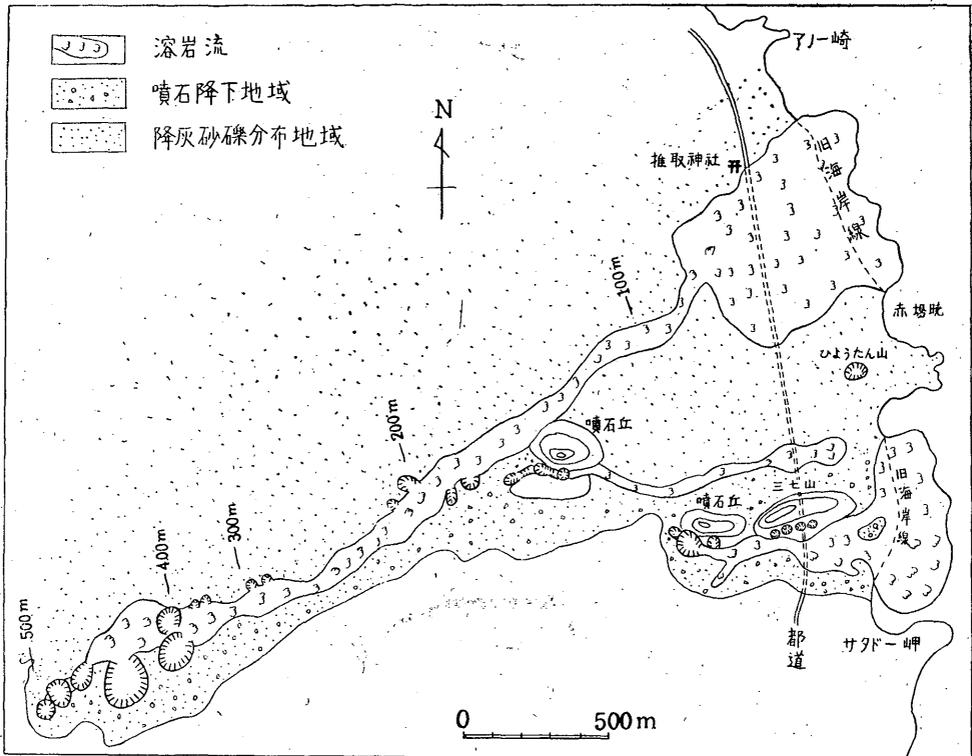
今回の噴火により、雄山の北東山腹では、海拔500 m付近からほぼ東へ一列に連なつて、サタドー岬近くの海岸近くまでの間に多数の火口ができた。新火口は溶岩流や噴石で埋没したものもあつて正確には算え難いが、20余個が存在している。いずれも小さく、直径は10~30mのものが多い。これらの火口は海拔100~150 m付近と200~300 m付近とで途切れがあるので、上部・中部・下部の3つの火口群に分けることができる（第16図）。

上部火口群はおよそ8個の火口からなり、そのうち最上部の2つの火口は爆裂と火山弾を放出しただけで溶岩を流出した形跡がない。その他の火口は何れも火山弾を

放出したほか多量の溶岩を流出した。また、最上部の火口からやや下つた所に昭和15年（1940年）の噴火でできた火口が2つあるが、今回ここからも再び噴火した跡がある。溶岩は北東に走る谷部を流下し、中部火口群の一部の溶岩流と合流して「ひょうたん山」（昭和15年噴火の噴石丘）の北側の平坦地に拡がり、一部はさらに流れて海中に入り、約100 mの沖合まで押し出して広大な溶岩原を作つた（北部溶岩流と名付ける）。

中部火口群は6~8個の火口からなり、火山弾および溶岩流を出した。火口付近には高さ10~20mくらいの噴石丘を作つたが、ここから発した溶岩流の一部は北側溶岩流と合流し、また、一部はそのまま山腹を流下した（中央溶岩流と名付ける）。

下部火口群には6~7個の火口が認められる。この火口群は最も長時間にわたつて活動を続け、3つの火口群の中では碎屑物が一番多い。「三七山」（海拔100m）と名付けられた新噴石丘を始め、いくつかの噴石丘を作り、また、溶岩流は付近の谷を埋め、さらに、サタドー岬北側の断崖を流れ落ちて海に入り、約200~300mの沖合ま



第16図 溶岩流分布

第 3 表 日別火山性地震回数，昭和37年10月以後の有感地震欄のガッコ内は震度を示す。
昭和37年12月以降は地震を観測した日のみを記した。（三宅島測候所観測）

震度	日付 (昭和37年)		25	26	27	28	29	30	31	計		9月	2	3	4
	8月	24										1			
I		多	> 57	51	8	56	14	100	40	>326		14	13	16	12
II		多	> 81	26	11	42	12	60	17	>249		5	3	5	4
III		多	> 52	7	1	13	3	17	10	>103		3	2	2	2
IV		多	> 33	1	0	4	0	5	0	> 43			1		
V		多	> 12	1	0	0	0	1	0	> 14					
有感計	0	多	>235	86	20	115	29	183	67	>735		22	19	23	18
無 感	0	多	多	多	302	>1000	>500	>400	>400	多		356	310	228	195
合 計	0	多	多	多	322	>1100	>500	>500	>500	多		378	329	251	213

震度	日付	9月	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
		5														
I		4	18	21	9	6	5	6	3	2		1	1	1	1	1
II		1	5	16	1	5	2		3	3	1				1	
III			2	5			1					1				1
IV																
V																
有感計		5	25	42	10	11	8	6	6	5	1	1	2	1	2	2
無 感		71	106	178	133	132	114	91	103	78	92	37	29	31	31	21
合 計		76	131	220	143	143	122	97	109	83	93	38	31	32	33	23

震度	日付	9月	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	計			
		20														
I		3		3	2	1	2	1		2	2	1	151			
II		2	1		1								59			
III													19			
IV													1			
V													0			
有感計		5	1	3	3	1	2	1	9	2	2	1	230			
無 感		33	24	26	14	4	10	10	9	6	0	4	2475			
合 計		37	25	29	17	5	12	11	9	8	2	5	2705			

1962年の三宅島の噴火(I)

日付		10月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
震度		1															
有感		2(II)	1(II) 2(I)	0	0	1(I)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1(II) 1(I)
無感		7	6	9	8	>5	1	2	3	2	1	1	4	2	6	2	4
計		9	9	9	8	>6	1	2	3	2	1	1	4	2	6	2	6

日付		10月	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	計
震度		17															
有感		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1(III)	0	0	0	0	9
無感		7	5	4	5	2	2	4	1	1	2	2	2	0	2	4	106
計		7	5	4	5	2	2	4	1	1	2	3	2	0	2	4	115

日付		11月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
震度		1															
有感		0	0	0	0	0	0	0	2(II) 1(I)	0	0	0	0	0	0	0	0
無感		3	3	1	0	0	1	0	7	7	1	1	4	2	3	0	2
計		3	3	1	0	0	1	0	10	7	1	1	4	2	3	0	2

日付		11月	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	計
震度		17														
有感		1(II)	0	0	0	0	0	0	1(IV)	0	0	0	0	0	0	5
無感		0	0	2	3	3	2	2	0	8	2	0	2	1	2	62
計		1	0	2	3	3	2	2	1	8	2	0	2	1	2	67

日付		12月	3	7	10	11	18	22	25	28	計	(昭和38年)		16	17	21	
震度		1										1月	11				
有感		0	1(I)	1(I)	0	1(I)	0	1(II)	0	2(I)	6			0	0	0	0
無感		4	0	0	1	0	2	0	1	0	8			2	1	3	1
計		4	1	1	1	1	2	1	1	2	14			2	1	3	1

日付		1月	23	計	2月	5	8	11	13	18	23	27	計	3月	6	12	27
震度		22															
有感		1(I)	0	1		0	0	0	0	0	0	0	0		0	0	1(I)
無感		0	1	10		1	1	1	2	1	1	1	8		1	2	0
計		1	1	11		1	1	1	2	1	1	1	8		1	2	1

震度	4月					5月					6月			
	日付	計	3	13	16	計	1	3	11	21	31	計	2	3
有感	1		0	0	0	0	0	0	0	0	0		0	0
無感	3		1	1	2	4	1	1	1	1	1	5	1	1
計	4		1	1	2	4	1	1	1	1	1	5	1	1

震度	7月				8月								
	日付	7	11	21	計	7	14	16	計	14	22	23	計
有感	0	0	2(II)	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
無感	1	2	2	5	1	1	1	3	1	1	1	3	
計	1	2	2	7	1	1	1	3	1	1	1	3	

第4表 被害 (東京都災害対策本部調, 昭和37年10月)

	項 目	被 害 内 容	被 害 数 量	被 害 金 額	備 考
一般住宅	住 宅	溶 岩 埋 没 焼 失	5 棟 (51.25坪)	3,600千円	噴 火
	〃	屋 根 ・ 壁 破 損	141棟 (1,336坪)	26,105	地 震
	貯 水 槽	破 損	322基	8,050	〃
	宅 地 石 垣	亀 裂 ・ 崩 土 壊	144か所 (40,788m ²) 273か所 (8,049m ²)	14,832 18,073	〃 〃
公共土木施設	道 路	埋 没 ・ 崩 壊 ・ 亀 裂		70,542	噴 火 ・ 地 震
農林漁業施設	農 山 漁 業 畜 産 養 蚕	崩 壊 ・ 亀 裂 ・ 降 灰		29,197	〃 ・ 〃
		崩 壊		51,015	〃 ・ 〃
		埋 没		5,420	噴 火
		〃		1,000	〃
	降 灰		102	〃	
農 作 物	〃		13,341	〃	
教 育 施 設	屋 根 等 小 破	6 校	1,577	地 震	
そ の 他	支 庁 砕 石 場 電 力	溶 岩 埋 没 電柱 29 本, 電線 4 km, 油開閉器など, 焼失, 破損		3,000	噴 火
				5,000	〃
計				250,854	

群発した。この地震活動は8月24日以降9月末までがことに激しく、8月26日15時48分の地震では三宅島々内で被害が発生した。この群発地震は、噴火におののいていた島民をますます動揺させる原因ともなった。

昭和37~38年(1962~63年)の三宅島の地震活動については、別題で本誌13~28ページに報告されているので、ここでは詳細を略し、三宅島測候所で観測した日別

火山性地震回数を第3表にあげるにとどめる。

§ 8. 被害状況

今回の噴火および8月26日15時48分の大地震による被害は第4表のとおりであった。噴火と地震による被害を区別しにくいので、備考欄には、おもに噴火によつて生じた被害には「噴火」、おもに地震に原因するものには

「地震」、どちらにも関係した被害には「噴火・地震」として区別した。

なお、噴火停止後も地震が群発したので、島民は相当動揺を来たし、9月1日から14日まで、小中学校の学童および関係者など千数百人が、主として千葉県館山方面へ集団疎開した。災害対策本部の調査によると、9月3日現在、全島民6359人のうち

島外疎開者	}	縁故疎開者	1938人
		学童疎開者	1732人
島内残留者	}	収容所	1220人
		自宅	1315人

その他旅行、入院などによる島外滞在者154人であった。

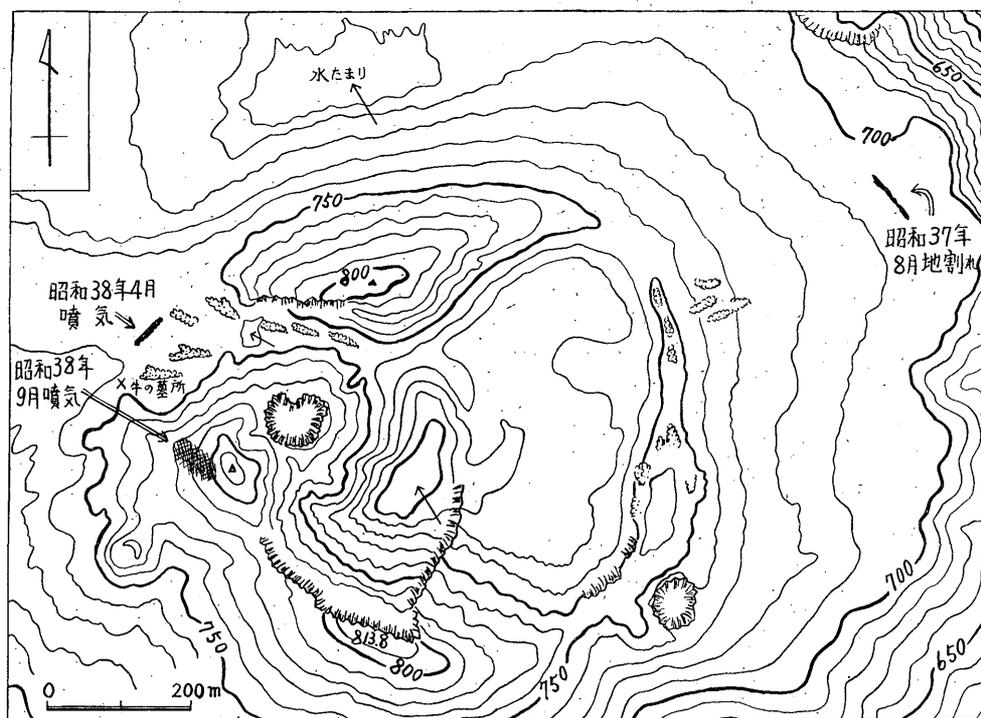
§ 9. 噴火後の表面活動

8月26日に噴火が終息してから8月末までは、溶岩流の全面から薄紫色の噴気があがっていた。とくに、火口およびその付近では噴気が目立ち、火口周辺には白ないし黄色の昇華物が付着していた。また、8月末までは溶岩流の端辺に赤熱部が見受けられる所があったが、9月

初旬には認められなくなった。溶岩の温度は9月末には所によつてまだ300°C以上が観測されたが、12月中旬にはごく一部を除いて外気と同じ温度にまで冷えた。12月末の噴気活動の状態は、火口群の一部および噴石丘の頂上だけにごく少量、常時出ている所があるだけで、他の地帯の噴気活動は止んだ。しかし、溶岩流の内部まで完全に冷えてしまったわけではなく、雨後には溶岩流のあちこちから水蒸気があがり、この状態は噴火後1年を過ぎててもまだ続いている。

また、新噴石丘の頂上付近には、噴火後間もなく無数の割れ目ができた。

なお、噴火後の雄山山頂の現地調査によれば(昭和37年11月24日)、頂上付近の外輪と中央火口丘との間の草原の東側に、今回の噴火地域に対してほぼ直角で南北に走る長さ100m、幅20~40cm、深さ50~100cmの地割れが発生しているのを発見した。噴火前の調査時(8月11日)にはこの地割れに気付かなかつたことから、これが今回の火山活動に関連して生じたものであることは疑いない。しかし、噴火によつてできたのか、地震によつてできたのかはわからない。



第18図 三宅島山頂要図

また、昭和38年(1963年)4月11日の現地調査によれば、雄山山頂火口の北西側にあたる昭和15年(1940年)噴火溶岩流の末端で、長さ30m、幅1mにわたつてかなり強い噴気が新しく出ているのを発見した。この噴気は付近の草木の枯れ具合からみて1週間から10日程前に始つたものと推定された。ところが、昭和38年(1963年)9月20日の現地観測によると、今度は山頂の噴石丘(昭和15年生成)の北西斜面で $40 \times 40 \text{m}^2$ にわたつて新しく噴気地帯が現われているのを発見した(第18図)。この地帯の噴気は9月5日の現地観測では気付かれなかつたものである。この2か所の新噴気地帯を結ぶ線は古い火口壁の跡にあたる所だから弱線地帯であるが、山頂の噴気活動は前年の大噴火の余じんとも考えられるものであろう。これら山頂の新噴気活動は昭和38年(1963年)9月末現在、大きな変動もなく続いているが、4月に発生した新噴気は少しずつ北東および南西方向に広がつてゆくように見受けられ、9月に発生した新噴気は北西および東方向に少しずつ広がつているように見受けられる。

§ 10 む す び

今回の三宅島噴火に際して、三宅島測候所は、気象庁、東京管区气象台および東京管内の諸気象官署の応援を得て観測を続けた。また、噴火後の非常時下で、日用品の入手もできないところに、多くの気象官署その他の機関から救援物資や見舞品が三宅島測候所に送られ、お蔭で業務をとどこおりなく遂行することができた。記して謝意を表する次第である。

三宅島測候所は、噴火の際の業績により10月16日、内閣総理大臣から表彰を受けた。また、11月6日には噴火の際の災害救助に対する協力により東京都知事から、11月30日には同じ理由で三宅村々長からそれぞれ感謝状を受けた。また、気象庁観測部も、11月6日に同上の理由により東京都知事から感謝状を贈られたことを付記する。

なお、噴火直後の昭和37年(1962年)9月11~13日に、中央防災会議が派遣した三宅島学術調査団には、気象庁から東京管区气象台長畠山久尚(現長官)および本庁観測部調査官諏訪彰が参加した。